親子遊びで親が「遊び手」となること－母親への面接と遊びの観察から－

富岡麻由子

日本語要約

親子遊びに関連する親の経験を扱う従来の研究では、親のもつ遊びに関する信念、親子遊びの実態、遊びにまつわる親の負担と支援に関心が向けられてきた。このような研究動向の背景には、親子関係の垂直性を前提として、子どもの心身の発達や特性との関連の観点から親をとらえることが自明とされていることがある。これを踏まえ、本論文ではこのような従来的な研究の視点から離れ、親子関係の水平性に関する研究と、楽しみや喜びの源泉として親子遊びを扱う研究に着目した。しかし、それらの研究では親が本来的な意味で親子遊びを楽しむ「遊び手」となることは想定されていない。遊び手としての親に着目することは、親子関係の水平性の概念、余暇活動としての親子遊びの理解をさらに広げ、親子遊びの多義性を示す新たな視座となると考える。よって、本論文では、親子遊びにおいて、遊び手としての親はどのような経験をするのか、遊び手としての親子はどのように関わるのかを明らかにすることを目的とした（第 1 章）。

上記の目的に迫るにあたり、本論文は、個別事例の記述に重点を置き、対象の主観的な現実構築のプロセスを理解しようとする解釈的アプローチを分析的枠組みとした。親子遊びを「子どもが楽しみを見出して行っている活動のなかで親子が持続的に関わる行為」、親が遊び手となることを「親自身が遊びに楽しみを見出して、主体的に子どもとの遊びに関与し、遊びを方向づける力を子どもと共有する態度をもつこと」と定義し、これに該当する親子遊びの事例を分析の対象とした。調査Ⅰ（面接調査）では、親が遊び手としての経験と、その経験を振り返るなかでの気持ちや考えを親の語りから抽出し、さらに調査Ⅱ（観察調査）では、親子遊びでの実際の関わりを間主観的に記述することとした（第 2 章）。

調査Ⅰでは、幼児の母親 8 名を対象とした面接調査から得た 22 事例を分析した。その結果、（1）母親は親子遊びのなかで自身も遊び手となり、幼少時の遊びの追体験、新たな発見、認識の刷新、親役割や大人らしさという社会通念上の制約からの解放感、達成感を経験しており、そこに親子遊びのよさを感じていること、（2）母親は、普段とは異なる、遊び手同士としての対等な関わり自体を楽しみ、それを希求していることが示された（第 3 章）。

調査Ⅱでは、5 組の母親と幼児を対象とする各家庭での親子遊びの観察調査で得た事例を分析した。その結果、（1）遊び手となった母親は、自身の多様な心情や要望を率直に言葉や表情で表したり、あえて子どもが想定するであろう遊びの展開や応答から逸れたりし、それにより遊びにせめぎあいが生まれたり、子どもがそれまでと異なる親への関わり方をみせたこと、（2）母親は親子の技量や体格の違いがあまり影響しない遊びで、実体験から意外なおもしろさを感じたり、遊びへの関わり方を自身で方向づけることで遊び手になっていたことが示された（第 4 章）。

以上の調査で得られた結果を整理し、親が遊び手となることが親子の関わりや親自身の生においてどのような意義をもち得るかについての知見を以下の三点にまとめた。一つめの知見は、(1)

母親は親子遊びの文脈だからこそ役割から解放されて遊び手となり、幼少時の遊びの追体験、新たな経験・発見、達成感、解放感を得ていたことであった。このことから、親子遊びは親の余暇になり得るとともに、遊び手となることで有用性の世界から離れ、心の全体性を取り戻し、自己への尊厳の感覚を高める可能性があることを指摘した。二つめの知見は、(2) 遊び手となった母親は、しばしば子どもが想定するであろう遊びの筋書きや期待される行動からあえて逸れる行為（オフスクリプト行為）をしていたことであった。遊びのなかで二者の思惑がズレることは、既存研究では「不調和」とされ、親子間の水平性の構成要素とみなされていなかった。しかし、実際にはこのようなオフスクリプト行為によって関わりに生じた起伏が、子どもの側には楽しみの伴う困惑、驚きや緊張感や期待を、母親の側には子どもの反応に対する期待感、子どもと相互にわかり合う実感をもたらしていたと解釈できた。さらに、オフスクリプト行為は、母親が子どもの他者性を改めて認識したり、親密な雰囲気のなかで自己の他者性を子どもに表していく契機になると考えられた。三つめの知見は、(3) 遊び手としての母親は多様な心情を言葉や表情で表明し、また自分が好む活動に子どもを誘い込み一緒に楽しむことを望んでいたことであった。これを母親の「率直さ」ととらえると、その率直さの表明は母親の内面に対する子どもの理解、母親の子どもに対する自然な共感、母親が本来的な自分でいながら子どもに関わることを可能にすると考えられた。本来的な自分でいる感覚、すなわち本来感は個人に幸福感や自己決定の感覚、良好な関係をもっている感覚をもたらすといわれる。よって、遊び手として率直に振る舞い、幸福感や本来感をもつことが親にとっての親子遊びの意義になりうると考察した。(第 5 章)。

遊び手としての親の経験や、遊び手同士としての親子の関わりの機微を実際的に検討したことで、親子遊びで起こっていることを新たな角度から切り出し、その多義性を示したことに本論文の意義がある。ただし、観察調査における親子遊びの再定義と家庭内に絞った観察によって事例抽出の範囲が狭まったこと、協力者の属性の類似性が高かったことなどが方法上の限界となった。今後は、同一の親子に対する観察調査と面接調査の実施、戸外の遊びを含めた調査などが研究を進展させていくうえでの課題となると考える（第 6 章)。